

大学生に対するメディア教育の評価(2)

園屋高志

(1993年10月6日 受理)

Evaluation of Media Education for College Students (2)

Takashi SONOYA

1. 本研究の目的

筆者は、大学での「視聴覚教育」の授業を、「メディア教育」(注1)の一環として位置づけて実践していることを、既に報告してきた¹⁾²⁾³⁾⁴⁾⁵⁾。

すなわち、筆者が担当しているA大学の「視聴覚教育概論」とB大学の「視聴覚教育」は、教員免許や司書・学芸員等の資格を得るための必修科目の一つであるが、その内容として、単に「学校教育や社会教育の場での視聴覚的手法の活用について学ぶ」という観点だけではなく、「日常生活に必要なメディアリテラシー(注2)を習得する」という観点の内容も取り入れることによって、メディア教育としての位置づけを行っているわけである。

これまでに筆者は、メディア教育の動向をふまえながら、大学でのメディア教育の必要性を主張し、そしてそれを実践するための授業内容を構成し、さらに授業展開上の種々のくふうを試みてきた。そこで、本研究では、このメディア教育の試みについてその評価を行うことにした。すなわち、本論文は、受講者に対して実施した調査結果をもとに、授業の効果を考察するものである(注3)。

2. 評価の方法と結果

大学生に対するメディア教育の必要性については、筆者が前論文²⁾で、①情報の受け手としてのメディアリテラシーと、②情報の送り手としてのメディアリテラシーの必要性を挙げて主張した通りであり、この授業ではこれらの習得を目的として、授業内容や授業方法をくふうしている⁵⁾。

従ってこの授業の効果を評価するには、上述の①と②が受講後にどれだけ習得されたかを調べることになる。その一つの方法として、これまでに筆者は、受講後の自由記述形式の感想文を分析し、メディアに対する態度・行動や認識面での変化を調べるという方法を実施しているが⁴⁾⁵⁾、本研究では、受講者のリテラシーに関する実態を受講前と受講後とで比較し、それによって評価するとい

う方法をとった。

(1) 評価の方法

上述のように、メディアリテラシーの習得状況を調べるわけであるが、ここではその中で筆者が特に重点を置いて扱った「テレビリテラシー」(注4)、特に上述の①のリテラシー、すなわち「日常生活でのテレビ放送の利用態度」に絞って調査することにした。すなわち、本研究ではB大学(私立文系女子大)での授業を対象とし、その受講者に対して、受講前(後期の授業開始時、1992年10月)と受講後(授業終了後、1993年1月)に、同一の「テレビの利用に関する調査」を実施し(記名式)、各質問に対する回答結果を受講前後で比較し、それによって授業の効果を評価するという方法をとった。

この場合、受講者の受講後のリテラシーの変化には、この授業を受けたこと以外の要因も含まれていると考えられる。そのため、この授業を受けなかった学生群と比較し、その要因を差し引いて考察することが厳密な評価になるが、この授業はほとんどの学生が受講するため、その比較は困難である。そこで便宜的に、受講者だけの受講前後の変化を比較して評価することにした。従ってその変化には上述の要因が含まれていることも考えられるが、ここではそれは考慮しないことにする。なお、使用した調査紙は、メディアリテラシーのうち、特にテレビリテラシーに絞ってその実態を調べるために、筆者が以前に作成し(文献2に詳述)、継続して使用しているものである。

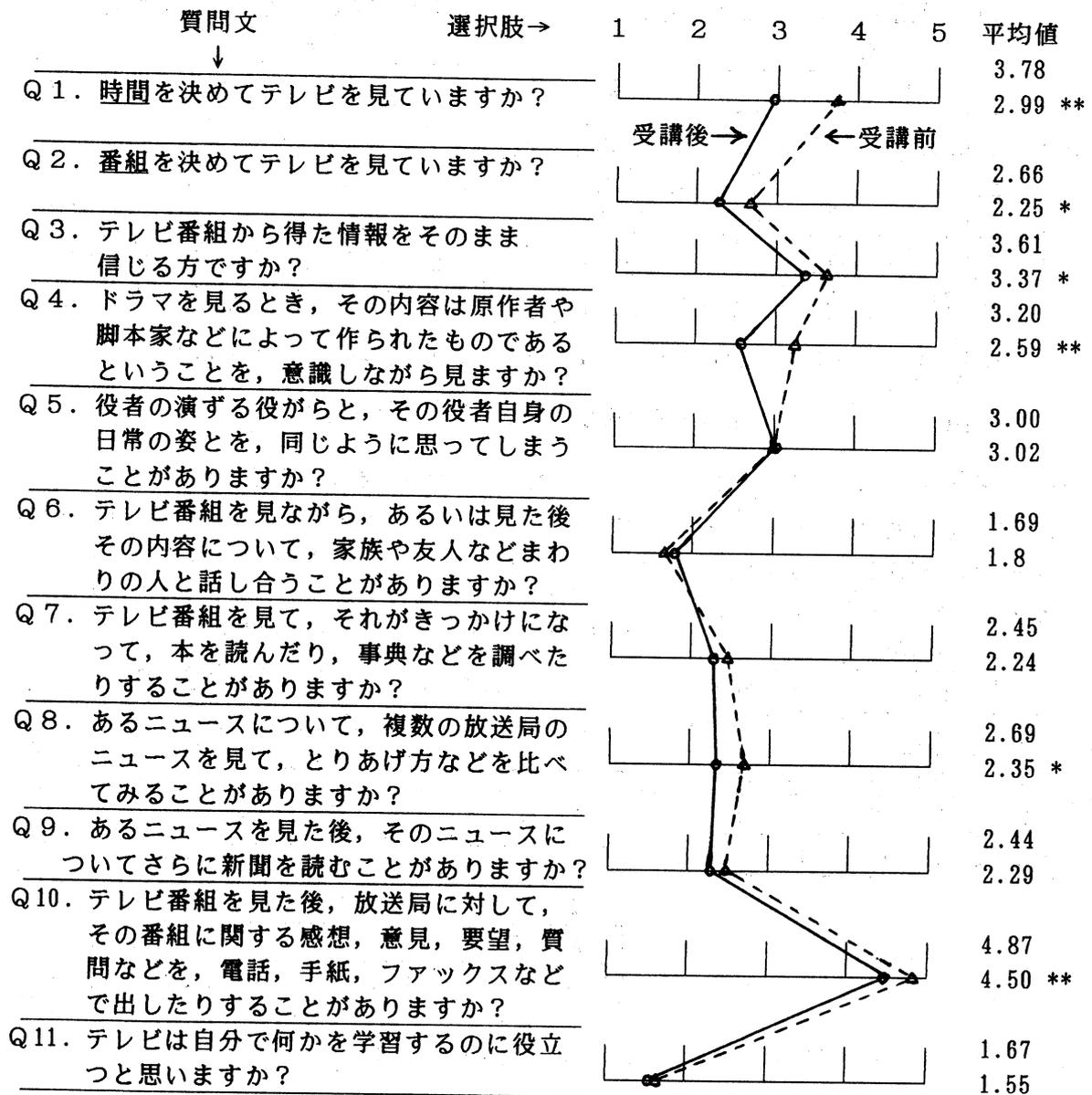
また、当該授業の単位取得者は206人であるが、そのうち、受講前または受講後のいずれかの調査紙に回答していない者、および無回答の含まれる者を除いた119人の調査紙を分析対象とした。その内訳は、1年生2人、2年生82人、3年生32人、4年生3人である。

(2) 評価の結果

調査紙は、図1に示したような質問とそれぞれに対応した5段階の選択肢(図1の下欄に掲載)で構成されている。そこで、各質問について、調査対象者119人が回答した選択肢の平均値をとり、それを受講前後で比較することにした。その結果を図1に示す。各平均値は右端に示されており、それをグラフ化したものが、破線(△、受講前)と実線(○、受講後)である。

筆者がテレビリテラシーとして特に認識させたいことは、「テレビ放送の〈一方向性〉を補うためには、テレビ放送からの情報を一方的に受け入れることをしない、あるいは情報を鵜呑みにしないような、冷静で批判的な視聴態度が必要である」ということである。図1のQ1～Q10の各質問文に示された行動については、様々な考え方や意見があると思われるが、上述の筆者の意図にもとづけば、受講後の平均値は受講前より小さくなるのが、すなわち図1で言えば受講後はより左側に位置することが望ましい。同図から、Q1、Q2、Q3、Q4、Q8、Q10で、受講後に平均値が有意に小さくなっていることがわかる。

特に〈一方向性〉に関しては、それを補うための具体的な態度や行動をレポート課題として考えさせており、前報告⁴⁾⁵⁾では、その課題によってその後の視聴態度が変わった受講者がいることを明らかにしたが(当該授業とは別のA大学での担当授業の場合であるが)、上述のように受講者全



◆各問の選択肢は以下の通り

Q 1～Q 2

- 1. いつもそうしている
- 2. ときどきそうしている
- 3. どちらともいえない
- 4. あまりそうしていない
- 5. 全くそうしていない

Q 3

- 1. 全く信じない方である
- 2. あまり信じない方である
- 3. どちらともいえない
- 4. やや信じる方である
- 5. よく信じる方である

Q 4

- 1. いつも意識している
- 2. ときどき意識している
- 3. どちらともいえない
- 4. あまり意識していない
- 5. 全く意識していない

Q 5

- 1. 全くない
- 2. あまりない
- 3. どちらともいえない
- 4. ときどきある
- 5. よくある

Q 6～Q 10

- 1. よくある
- 2. ときどきある
- 3. どちらともいえない
- 4. あまりない
- 5. 全くない

Q 11

- 1. 思う
- 2. やや思う
- 3. どちらともいえない
- 4. あまりそう思わない
- 5. 思わない

図1：調査結果 ※各問の右端の「平均値」は、有効回答者119人の回答の平均値で、上段が受講前、下段が受講後を示す。(有意差は、** 1%, * 5%)

表1：受講後のQ1とQ2の関係

		Q2				
		1,2	3	4,5	計	計%
Q1	1,2	50	2	1	53	44.5
	3	9	5	0	14	11.8
	4,5	26	7	19	52	43.7
	計	85	14	20	119	100
	計%	71.4	11.8	16.8	100	-

表2：受講後のQ8とQ9の関係

		Q9				
		1,2	3	4,5	計	計%
Q8	1,2	64	8	10	82	68.9
	3	8	2	2	12	10.1
	4,5	12	2	11	25	21.0
	計	84	12	23	119	100
	計%	70.6	10.1	19.3	100	-

※表1, 表2ともに, 選択肢1と2, 4と5をそれぞれ合計し, 3段階にまとめたものである。

※数字は表2, 3, 4ともに人数を表す。ただし計%欄は%を表す。

表3：学習へのテレビ利用状況

- Q12. 現在, あなた自身, テレビを何か学習に利用していますか?
1. 利用している 2. 利用していない

		受講後			
		1	2	計	計%
受講前	1	28	13	41	34.5
	2	9	69	78	65.5
	計	37	82	119	100
	計%	31.1	68.9	100	-

表4：レポートを紹介することについて

- Q8. もし自分のレポートが紹介されるとしたらいやである
Q9. 他の人のレポートが紹介されるのはかまわない
1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらともいえない
4. あまりそう思わない 5. そう思わない

		Q9 (計%欄以外は人数)						
		1	2	3	4	5	計	計%
Q8	1	8	3	3	1	0	15	11.9
	2	10	9	4	0	1	24	19.0
	3	15	10	18	1	0	44	34.9
	4	14	6	3	0	0	23	18.3
	5	17	2	1	0	0	20	15.9
	計	64	30	29	2	1	126	100
	計%	50.8	23.8	23.0	1.6	0.8	100	-

体で見ても, Q8とQ10の行動に変化があったことが明らかになった。

また, 受講後のQ8とQ9の関係を表2に示したが, 同表から, Q8の行動をとるものほど, Q9の行動をとっていること(64人, 54%), すなわち, あるニュースについて, 複数の放送局のとりあげ方を比べたりする者は, それについて新聞を読む傾向にもあることがわかった。

さらに, Q1, Q2の回答もそれぞれ有意に変化している(図1)。このQ1とQ2の関係(受講後)を調べたのが表1であり, 「時間も番組も決めてテレビを見る」者が多い(50人, 42%)ことがわかる。これらのことから, 受講前は無目的に受動的に見る態度であったのが, 受講後は「時間や番組を決めてテレビを見る」という能動的態度に変化したことが推察される。

一方, テレビを学習に利用することについての考え方や態度も調査したが, その結果は, 図1のQ11および表3に示されたようになった。Q11からわかるように, 「テレビは自分で何かを学習するのに役立つと思っている」者は, 受講前後で変わらず多い。しかし, 受講前または受講後のその時点で「テレビを何か学習に利用している」者(50人, 42%)は, 「利用していない」者(69人,

58%)よりも少ない。このことは、「テレビは何かを学習するのに役立つ」と思っている、それが実際の行動として表れているとは言えないことを示している。この原因としては、テレビで学ぶ必要性や意欲がないこと、あるいは必要性や意欲があっても、自分がしたい学習に適するテレビ番組がないことなどが考えられる。この点は今後さらに調査したい。

3. 教育方法の評価

前報告⁵⁾の中で、この授業ではその展開の際に種々の工夫を行っていることを述べた。たとえば、(1)授業それ自体に様々なメディアを用いる、(2)書き込み式自作テキストを使用する、(3)感想の提出と発表をする、などである。このほか、レポート課題についても、(4)目的を持ってテレビ視聴・テレビ聴取をする課題、(5)OHP用教材の作成と発表の課題など、受講者が自分自身の考えを出し、行動しなければならないようなものを課している。

教育方法の評価という観点から、授業展開上のこれらの工夫についても評価する必要があるが、このうち(4)については調査の結果、課題の意義があったことを既に明らかにしている⁵⁾。ここでは上述のうち(3)に関連したことの評価結果を述べる。(3)は、毎時間のテレビ視聴後または授業の最後に、受講者に感想や意見などを書かせて提出させ、その中から多くの者に共通する内容のもの、ユニークなもの、ユーモアのあるもの、さらに質問などを数名分選び出し、それらをOHPシートに複写し、次回の授業の最初にOHPで紹介するというものである。筆者の意図は、これを続けることによって受講者が感想や意見をきちんと書くようになること、また受講者との間のコミュニケーションをはかることにある。

ところで、このようなテレビ視聴後の感想の紹介だけではなく、これに類似した以下のような手だてもこの授業ではとっている。

①授業内容に関して受講者に調査を行い、その調査結果を受講者に紹介する。

②提出されたレポートのうち、いくつかを紹介する。

このうち①については、第1回の授業時に行った、「視聴覚機器の利用に関する調査」や「テレビの利用に関する調査」（前述のリテラシー調査に用いたもの）の結果を、随時紹介していくというのがその例である。たとえばその中の、「今までOHPのシートに何か書いたり、OHPを使ったりしたことがありますか？」という質問の回答結果を、OHPの教材作成法を学ぶ時間に紹介したり、また「あるニュースをテレビで見た後に、そのニュースについてさらに新聞を読むことがありますか？」という質問の回答結果を、テレビの利用法を学ぶ時間に紹介する、というような手だてである。

一方②は、途中で出題し回収したレポートの中から、代表的なもの、良いもの、ユニークなものなどを数人分選択し、それらを授業時に紹介するという手だてである。この場合、前述の「テレビ視聴後の感想の紹介」と同様に、あらかじめそのレポートをOHPシートに複写しておき、OHPでそのまま提示するという方法をとっているが、これは単に口頭で読み上げて紹介するのに比べて、受講者にリアルに感じさせるためである。

- Q 1. 調査結果の紹介は、他の人の様子や考え方を知るのに役立つ
 Q 2. 調査結果の紹介によって、その内容に関心が高まる
 Q 3. 調査結果の紹介は、教師と学生との間のコミュニケーションに役立つ
 Q 4. レポートの紹介は、他の人の考えを知るのに役立つ
 Q 5. レポートの紹介によって、その内容に関心が高まる
 Q 6. レポートの紹介は、教師と学生との間のコミュニケーションに役立つ
 Q 7. 他の人のレポートを見ることによって、次のレポートは
 しっかり書こうと思うようになる

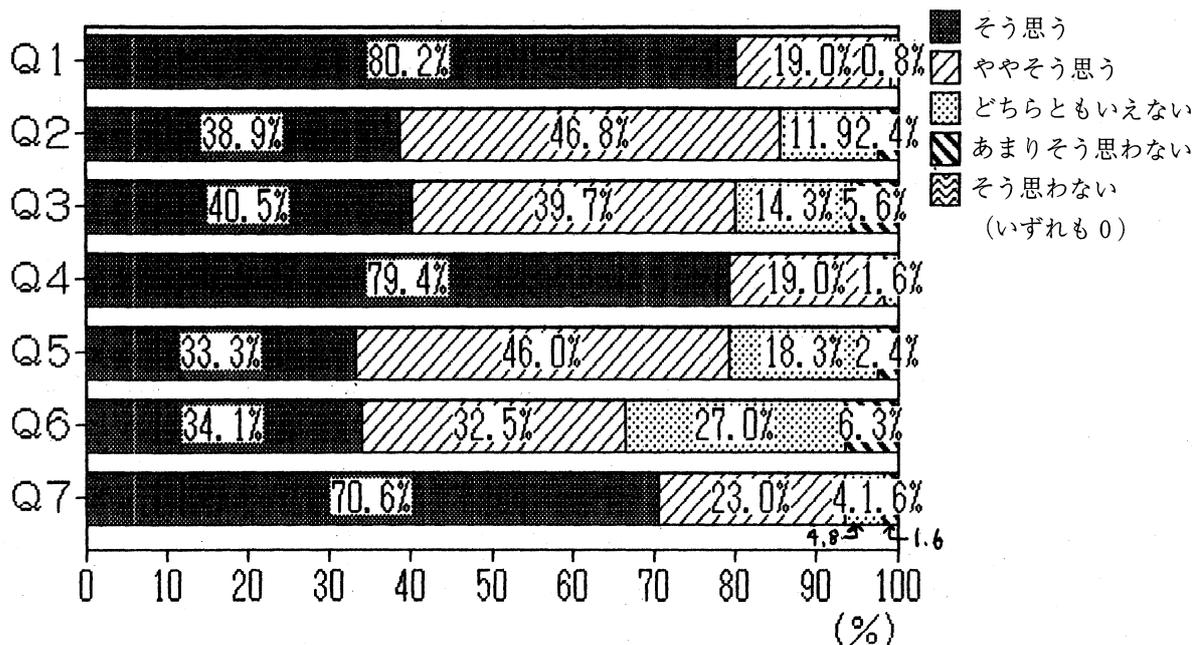


図2：「調査結果やレポートの紹介」についての調査結果

大学での多人数を対象とする授業では、ややもすると教師側から受講者側へ一方向的な情報提示に終始してしまうことになる。これを防ぐために、受講者の実態や考え方を把握し、それを再び受講者にフィードバックすることによって、双方向のコミュニケーションをはかるという方法を、筆者は既に別の授業でもとっており⁶⁾、また他の報告例もある⁷⁾。

この授業においても受講者とのコミュニケーションをはかるとことを主な意図として、上述の(3)と①②をときどき行ったわけであるが、今回は①②のことについての受講者の感想などを調査し、その効果を調べることにした。調査方法としては、上述の①②を数回行った後、調査紙を配布し、図2に示したQ1からQ7までの内容に対して、そう思うか思わないかを5段階で回答させるという方法をとった。回答者は126人で、その結果は図2の通りである。

まずQ1では、調査結果の紹介は「他の人の様子や考え方を知るのに役立つ」ことが、「そう思う」80.2%、「ややそう思う」19%で、これは当然のことであろう。またQ2の、調査結果の紹介によって「その内容に関心が高まる」については、「そう思う」が38.9%、「ややそう思う」が46.8%で、それによって関心を高めるといふ筆者の意図は概ね達成されている。さらに筆者がもっとも意図していることはQ3の「教師と学生との間のコミュニケーションに役立つ」ということであるが、

